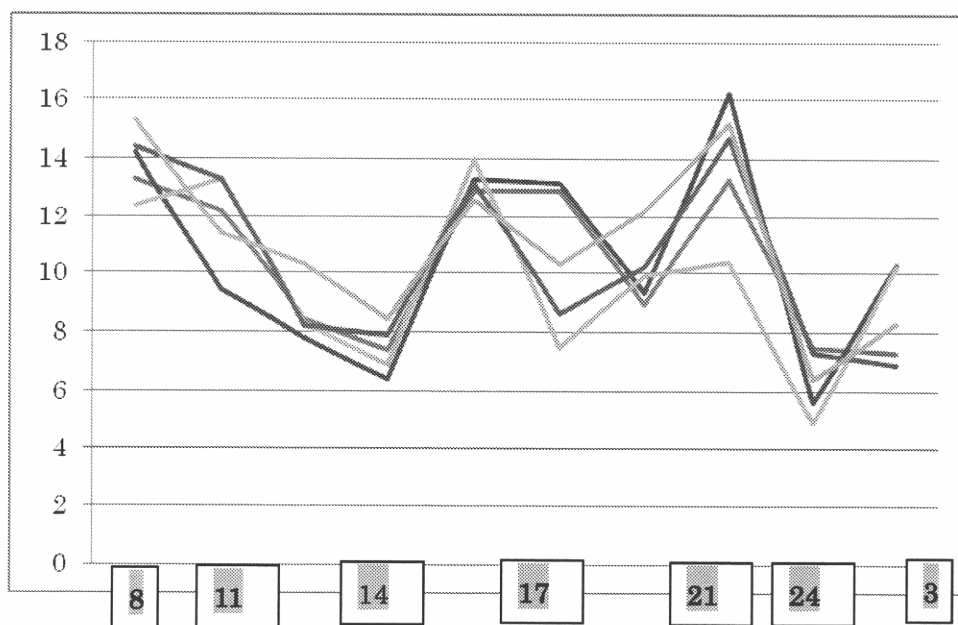


- b) 各検体は duplicate で行なった.
- c) 検量線は 50-5000pg/ml では linear であった.
- d) NT-3, NT-4 との cross reaction は 5%以下であった.
- e) CV 値は intraassay 8%, interassay 10%であった.
- f) Freeze and Saw は 2-3 回であれば結果に影響なかった.

結論：我々の血清 BDNF 測定法は正確で再現性に高い方法であることが証明された.

2)血清 BDNF 濃度に日内変動は存在するのか?



結論：少数サンプルでの予備的研究であるが、8時、21時が最も高値であり、14時と3時が最も低値であった。以上のことから、サンプリング時刻を一定にすることが好ましい。

知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

該当なし。

2. 実用新案登録

該当なし。

3. その他

該当なし。

平成 22 年度厚生労働科学研究補助金(障害者対策総合(精神障害分野)研究事業)

抗精神病薬の多剤大量投与の安全で効果的な是正に関する臨床研究

分担研究報告書

統合失調症患者の予備的な処方調査について

～精神科臨床薬学研究会処方調査報告～

吉尾 隆 (東邦大学薬学部医療薬学教育センター)

日本国内における統合失調症患者に対する薬物療法は諸外国と比べ特異的であり、抗精神病薬の多剤併用大量処方が特徴として挙げられる。現在、抗精神病薬による治療は単剤・低用量で行うことが世界的にも推奨されているが、特に長期慢性の入院患者に対して多剤併用大量処方が継続されており、その改善が見られていないことが 2005 年、2006 年に精神科臨床薬学研究会（以下 PCP 研究会）によって行われた調査から判明している。2005 年の調査では、9 施設 1,893 名の統合失調症患者に対する抗精神病薬の平均投与剤数および投与量はそれぞれ 2.0 剤/日、812.6mg/日、単剤処方率は 31.1%、第 2 世代（非定型）抗精神病薬（以下第 2 世代薬）の処方率は 69.4%、単剤処方率は 27.1%であった。また、2006 年の調査では、61 施設 9,325 名の統合失調症患者に対して同様に 2.2 剤/日、873.8mg/日、30.1%、73.7%、24.4%という結果が得られた 1) 2)。

PCP 研究会では、2005 年より全国の精神科病院および精神科病床を有する総合病院、大学病院に入院中の統合失調症患者の薬物療法に関する処方調査を行っている。その結果、現在まで、国内における入院中の統合失調症患者に対する薬物療法では、単剤処方率が約 3 分の 1 であり 2 剤併用と 3 剤以上併用がそれぞれ約 3 分の 1 であることが判明している。2007 年以降 2009 年までの調査では、抗精神病薬は第 2 世代抗精神病薬の処方率が第 1 世代抗精神病薬の処方率を上回り、抗パーキンソン薬の処方率、投与剤数・投与量も減少しており、1 日の服用回数が減少するなどの変化が見られる。国内の入院中の統合失調症患者の薬物療法では、単剤処方率は大きく向上していないが、抗精神病薬、抗パーキンソン薬、抗不安薬・睡眠薬の 1 日平均投与剤数・投与量は減少してきており、適切な薬物療法に近づいているように思われるが、新たな問題として第 2 世代抗精神病薬同士の併用が増加するという状況もみられる。

PCP 研究会では全国規模の処方調査を継続し、国内における統合失調症の薬物療法の適正

化に寄与するために2010年度の調査について本研究班の予備的検討ということで引き続きPCP研究会の協力を得て処方調査を行った。

1. 統合失調症患者の薬物療法に関する処方実態調査(2010年)～全国152施設の調査から～ その1

精神科臨床薬学研究会は国内の統合失調症(入院)患者における薬物療法の実態を把握するため、2005年以降継続して全国処方実態調査を行っている。本報告では2010年度の調査結果について報告する。尚、本調査では個人情報情報を慎重に取り扱い十分な倫理的配慮を行った。【目的】国内の統合失調症(入院)患者における薬物療法の実態を把握する。【方法】本研究会会員の所属する152施設に入院中の統合失調症患者23680名について、同一日の処方を調査した。【結果】対象患者の平均年齢58.1歳(8-100歳)、男女比12377名/11303名、1日平均服用回数3.5回(0-11回)であった。抗精神病薬及び併用薬1日平均投与剤数・投与量(min-max)は、抗精神病薬2.0剤(0-10剤)・804.8mg(CP換算:0-9695.0mg)、抗パーキンソン薬0.7剤(0-4剤)・1.9mg(BP換算:0-30.0mg)、抗不安薬・睡眠薬1.5剤(0-8剤)・15.1mg(DAP換算:0-400.0mg)であった。抗精神病薬1,000mg(CP換算)以上の大量処方の割合は29.7%(昨年32.4%)、単剤処方率は35.2%(昨年33.0%)

であった。第2世代薬は84.0%(昨年81.4%)で処方され、単剤処方率は36.2%(昨年33.9%)であった。各第2世代薬の平均投与量はAPZ18.5mg(1.0-48.0mg)、RIS(oral)5.4mg(0.2-25.0mg)、RIS(RLAI)40.8mg(12.5-50mg)、OLZ15.0mg(0.2-40mg)、QTP360.0mg(6-1,200mg)、PER26.0mg(1-88mg)、BNS17.0mg(1-36mg)、CLZ278.0mg(12.5-600mg)であった。抗精神病薬投与患者における併用率は、抗パーキンソン薬58.8%(昨年61.8%)、抗不安薬・睡眠薬77.4%(昨年78.7%)、気分安定薬33.7%(昨年32.9%)であった。【考察】国内の統合失調症(入院)患者に対する薬物療法は、未だ多剤併用大量処方ながら第2世代抗精神病薬の処方率は84.0%に達し、抗パーキンソン薬の併用率低下が推察された。

2. 統合失調症患者の薬物療法に関する処方実態調査(2010年)～全国152施設の調査から～ その2

精神科臨床薬学研究会(PCP研究会)は、国内の統合失調症入院患者における薬物療法の実態を把握するため、2005年以降継続して全国規模での処方実態調査を行っている。本報告では、2006年以降5年間の調査

報告の全体をまとめた“その1”を受けて、特に第2世代抗精神病薬（以下、第2世代薬）の併用処方動向について検討した結果を報告する。尚、本調査に関しては個人情報 を慎重に取り扱い、十分な倫理的配慮を行った。【目的】国内の統合失調症入院患者における薬物療法の実態を把握する。【方法】本研究会会員の所属する精神科病院152施設に入院中の統合失調症患者について、同一日の処方を調査した。尚、多剤大量投与の定義は抗精神病薬2剤以上の使用を多剤投与とし、クロルプロマジン（CP）換算値で1000mg以上を大量投与とした。【結果】これまでの処方調査結果から、抗精神病薬の併用処方動向について検討を行った。第1世代抗精神病薬（以下、第1世代薬）の多剤併用率は17.4%（2006年）～10%（2010年）に減少していた。また、第1世代薬と第2世代薬の多剤併用率は46.1%（2006年）～42.2%（2010年）で横這い傾向であった。一方、第2世代薬同士の多剤併用率は6.4%（2006年）～11.4%（2010年）へと増加傾向を示しており、平均CP換算値は1064.8mgと大量値を示した。【考察】2006年～2010年までの処方調査結果の推移について検討したところ、全体の単剤処方率は29.4%（2006年）～35.2%（2010年）まで増加していたが、併用処方率は7割弱と依然として多い傾向にあった。第1世代薬同士の併用処方が減少する一方で、特に第2世代薬同

士の多剤併用処方は増加傾向を示しており、これまでの併用傾向が逆転するのは必至である。

1. Yoshio,T., Kurosawa,M., Sugimura,K, et al : Current status of psychopharmacological treatment of schizophrenic patients in Japan : From the 2005 nationwide survey of 9 psychiatric hospitals in the psychiatric Clinical Pharmacy Society. Jpn.J.Clin.psychopharmacol.,10 : 1721-1731,2007)
2. Yoshio,T., Uno,J., Nakagawa,M et al : Study of the prescriptions for psychopharmacology treatment in Japanese inpatients with schizophrenia in 2006.Jpn.J.Clin.psychopharmacol.,13 : 1535-1545,2010

知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
該当なし。
2. 実用新案登録
該当なし。
3. その他
該当なし。

